

「柏崎の橋」 53 諏訪橋（^{かむら}上村橋）（新道）

諏訪橋は、新道地区を流れる鶴川に架かる橋であり、史跡・飯塚邸のそばに架かる中村橋の150m程上流に位置する。

この橋は新道地区^{かみむら}上村地内にあり、かつては「^{かむら}上村橋」と呼ばれた。はじめは古町堰からひいた灌漑用水を鶴川の東岸から西岸に渡すための橋であったので「水ばし」とも言われた。年代は不明だが、水揚げポンプを使うようになり灌漑用水のための橋が不要になると、村人が渡ることできる橋となった。

「諏訪橋」の名は諏訪神社に由来すると考えられる。昭和12年発行の『刈羽郡神社明細帳』には、新道が属していた旧高田村の諏訪神社として、藤橋地内の諏訪社が掲載されている。人が渡れる橋となり、ここへお参りする際に利用されるようになった頃から諏訪橋と呼ばれるようになったと推測される。



国土地理院発行 2万5千分の1地形図
『越後野田』（平成11年発行）を掲載

『柏崎市伝説集』には、この橋にまつわる次のような伝説が記されている。

「かつて橋を新しく架け替える際、上村の村人が渡り初めをすることになっていた。ところが、まだ渡り初めをしないうちに旅の山伏が新しい橋

を渡ってしまった。渡り初めをすることになっていた村人が怒って山伏を打ったところ、打ちどころが悪くて山伏が亡くなってしまった。橋のたもとに山伏を埋めたが、数年経ってからその村人の家に不幸が続くようになった。村のお坊さんにみてもらうと、山伏のたたりだと言われたため、丁寧に改葬し石塔を建てた。」

その後、道路工事や橋の架替工事のため、改装した塚はなくなったという。石塔の位置も変わったと伝わるが、現在も諏訪橋付近にこの石塔は建っている。



新諏訪橋から見た諏訪橋
奥に中村橋の白い欄干が見える

最初に橋が架けられた時期は不明だが、橋にまつわる伝説について『柏崎の民俗』で「発生年代も比較的新しく、せいぜい百年前後、いやもっと近い時期にあった出来事を背景にしているようにも思われる」と述べられている。また、江戸時代後期の『白川風土記』や明治・大正時代の『柏崎文庫』に^{かむら}上村橋の名はないことから、この橋は比較的新しい時代に造られたと考えられる。

現在の橋は長さ50m、幅2.5mで、昭和47年3月に竣工。平成26年度に修繕工事が行われた。橋の名は伝説と共に後世に残ることだろう。

●参考にした本

『柏崎市伝説集』（388 Kキヨ）柏崎市教育委員会 編
『柏崎の民俗第2号』（388 Kミン）柏崎民俗の会 編
『刈羽郡神社明細帳』（170 Nシン）
新潟県神職会刈羽郡支部 編